

見渡す限り何も無いだっ広い空間に、また新しい訪問者が来たらしい。

何もないこんな場所に、何でわざわざと思いつながら、重い腰を上げた。扉の向こうで早く招き入れるとアピールしているのは、開ける前から分かっている。前に居た奴も、その前に来た奴も同じだったから。

「いらつしやい、よく来たね」

扉がぶつからないよう、ゆつくり開けた。こちらからは逆光になっていて、顔や姿はよく分からない。ま、ここでは男も女も関係ないんだけど。

「どこから来たんだい？」

新参者に話しかけながら、ロビーを先導する。そいつは口を動かしたようだが、私の耳では何を言ったか拾い切れない。聞こえていないことが分かったのか、もう一度繰り返したが、やはり何も聞こえない。

「ああ、気にすることは無いよ。こちらからは見えないし、聞こえない。そういう決まりなんだ。で、あんたの名前は？」

新参者は、「 」と答えた。

「 さんね」

柵から年季の入ったボードを手に取り、新しい紙を挟み込んだ。名前の欄に、「 」と書き込む。

「何にも書いてないか、だつて？ そうだよ。ただの気分だよ、気分」

所定の様式に沿って、残りの空欄を埋める。枠線とフォーマットに則った元の用紙があるだけで、さつきと何も変わらない。ここまでの会話も、こちらが一方的に喋っているだけで、相手の反応も姿形も何も分からない。

でも、さつきから一方的に見つめられるだけよりはマシさ。ま、見つめたところで、そつちもこつちの姿も声も認識できないんだらうけど。

「こんなところに来たって、まだ何にも用意できてないぜ？」

新参者に、自分の後ろに何も無いことをアピールしてみる。虚無とも混沌ともつかない、「間」だけが広がっている。

「イスとか、飲み物は」

新参者の方を見ると、セルフサービスで椅子を運んできた。ついでに、ドリンクも自分で取りに行っている。

「理解が随分早いじゃないか。そう、何か欲しいものがあれば自分で用意すること。ここでのルール？ 特にないな」

そう言いながら、たっぷり液体の入ったコップを持ってきた新参者に、殴りかかってみる。こちらからの暴力も、特に禁止はされていない。しかし、殴ったところで届くような距離でもない。

「安全は多分保証されてるから、あとは自己責任でよろしく」

そいつに向かって笑いかけてみたが、多分こちらからの声も聞こえてはいまい。姿も恐らく見えてはいない。そんなことはない？ いやいや、やっぱり見えてないでしょ。

「そのアンタに言っただけど」

目の前にいるはずの人物に向かって、ビシッと指を差してやる。

「指も見えてないだろ？ ビクついてないのも分かってるぜ」

本当に見えてたら今頃、顔を背けているか、この文字を目で追いかけられていない。

「そう、アンタだよ、アンタ」

もう、分かってるよね？ これ以上は、野暮なことと言わない。

「ご覧の通り、まだ何にもないんだけど、コレからもよろしく頼むよ」

初出 令和四年一〇月六日 noteにて公開